

「胸腹部腫瘍の放射線診断」

日本医学放射線学会中部地方会 放射線医学講習会世話人 木戸長一郎 編

九州大学教授

松 浦 啓 一

日本医学放射線学会は専門医制度を発足させて10年になる。医療制度が欧米のように確立されておらず、分担も定かでない状況のもとで、専門医を学会が認定したところで何のメリットもないではないかという批判は、放射線学会会員の中にすら根強く残っている。しかし、各分野に力のある専門医がいて、お互が力を合わせてこそ最も患者の利益になる診療ができるということは間違いない事実である。最近の放射線診断の進歩はめまぐるしい、すばらしい速度である。多岐にわたるのみでなく、各々の深さを増してきた。ぼんやりしていると、いつの間にかとり残されてしまう。何時でも最高のレベルの診断ができるようにするためには、絶えず補習をしてゆかねばならない。放射線学会には教育委員会があって注意を喚起してはいるが、

実際にはなかなかうまくゆかないのである。大変なご苦勞であるが、世話人となる良い人がいなくては続かない。この点、中部地方会は幸いな、と思う。世話人であった松田忠義博士もそうであったが、木戸長一郎博士がまた良い。企画も宜しかったと思うが、このように1冊の本にまとめあげてくれている。日常の超多忙な臨床の中にあつて、企画から本にするまでそのご苦勞は大変であったと推察する。

内容は診断法の進歩と病変の鑑別診断に分かれている。診断法の進歩では、CTを含めての画像診断という立場より、各種検査法の意義について再検討を試みているように思われる。病変の鑑別診断の項では、胸部、消化管、肝、腎、胆道と各組織器管別に新しいX線診断の意義を癌との鑑別という観点より述べてい

る。そして、最後に症例討議という項を設け、不足部分を補っているかにみえる。

内容は誠にユニークである。教科書のように教科書でない。原著のようで原著の集積でもない。専門家が一段と臨床の腕をあげるために大変役立つのみでなく、これから放射線診断の修練を始める人のためにもよい指針となるであろう。

講習会の講演をまとめたということであるが、そのためか内容が肩のこらない書き方であるのもよい。そして聞いた所どころからでも読み出してよいのも一つの特徴であろう。何だか良いことばかり書いたような気もするが、値段も手頃だし、1冊手もとにおいておかれて良いのではないでしょうか。

B5 頁296 図29 写真518 1978
¥7,000 ㊦200 医学書院 刊